

22年度 ヨーロッパ政治史II 学年末試験

飯田 芳弘

問題

ウィーン会議から第一次世界大戦前までの約1世紀の間の東ヨーロッパに存在した国々について、それらの国家の領域的枠組みや国家間の関係はどのように変化したか、さらに各国家における政治体制（＝政治構造の仕組み）のあり方（とその変容）はいかなるものであったかを具体的に説明しなさい。説明にあたっては、国ごとに論じるのではなく、上記の約1世紀の間に適切な時期区分を設け、それぞれの時期区分における状況を論じること。また、年表のような年号と事実の単なる羅列にならないようにすること。

（※）答案の様式や制限字数、提出期間、提出方法、注意事項（「とくに注意すべき点」として指摘した2点については、十分に留意すること）などは、「授業案内」のラベルの中の「学年末試験について」という文書の中に記されていますので、それにしたがってください。

講評

今回の試験において低い評価しか得られなかった答案には、いくつかのパターンがある。それを紹介する。

・「時期区分を設ける」ことを「時代順に論じる」「時系列に沿って論じる」と勘違いして、設問の答えになりそうな事実を早い方から並べていった答案→実態は年表のような年号と事実のられるにすぎない答案となっている。

・時代の区切り方が機械的である。「19世紀前半と（半ばと）後半」のような区分をする答案。→たとえば、わかりやすい例として、第二次世界大戦の時期区分として、「復興期」－「高度成長期」－「低成長期」のようなポピュラーな分け方がある。それぞれの区分にはそれぞれの意味や特徴がある。よい答案は、なぜその区分を採用したのか、区分の意味は何かをも書いていた。「19世紀前半と後半」のような区分も、結局は、年表的な年号と事実の羅列に等しくなる。

・三帝国のいざれかしか論じない。あるいは、初めから三帝国のみを論じる。19世紀の東ヨーロッパには帝国から独立した新興国家も多く、その政治体制の変化も重要な問題として講義では詳しく説明した。

・重大な事実の誤り。時間が十分にあり、何を参考にしてもいいので、重大な事実誤認については大きな減点を行った。

以上